

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2170102483		
法人名	社会福祉法人 岐協福祉会		
事業所名	グループホーム 大洞岐協苑		
所在地	岐阜県岐阜市大洞3丁目3番地1号		
自己評価作成日	令和5年8月21日	評価結果市町村受理日	令和5年12月18日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaiyokensaku.mhlw.go.jp/21/index_nhp?action=kouhyou_detail_022_kani=true&JigyouvoCd=2170102483-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ぎふ福祉サービス利用者センター びーすけっと		
所在地	岐阜県各務原市三井北町3丁目7番地 尾関ビル		
訪問調査日	令和5年10月10日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

山に囲まれた自然豊かな立地の中、ホームは2階にありリビングの大きな窓や、それぞれの居室からは心癒される風景が広がっています。コロナ禍で外出や地域の方々との交流ができない期間がありました。徐々に再開しています。ホーム内での行事やサークルに力を入れ、お菓子作りや運動レクなどを行い気分転換を図っています。入居者同士は仲が良く、お互いを思いやり、助け合おうとする姿がみられます。スタッフは皆さんが心地よく過ごして頂けるよう、笑顔・雰囲気作り心掛け、言葉遣いに注意しながら温かいケアを目指しています。併設の特別養護老人ホームがあり、グループホームでの生活が困難になった場合の住み替えも可能となっています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は4階建ての法人施設の中にあり、デイサービスや特別養護老人ホーム等、複数の事業が展開されている。交流スペースもあり、様々な地域交流や研修会も開催している。自治会をはじめ、社会福祉協議会、シニアクラブなどの地域団体と、運営に関する意見交換を日常的に行っている。職員会議は、事前に課題点など職員が意見を提出した上で、思いや意向について話し合い、改善につなげている。利用者個々の担当者は、服薬管理や体調変化、食事の提供等、他の職員と連携しながら責任を持って支援し、月例報告書は家族に送付している。資格取得の研修時にはシフトに配慮したり、リモートでの研修受講等の支援で有資格者の拡大に努めている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
43	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:15)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	50	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:8,9)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
44	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:14,27)	<input type="radio"/>	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	51	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2)	<input type="radio"/>	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度ある 3. たまに 4. ほとんどない
45	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:27)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	52	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:3)	<input type="radio"/>	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
46	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:25,26)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	53	職員は、活き活きと働いている (参考項目:10,11)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
47	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:36)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	54	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
48	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:20)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	55	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどいない
49	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:18)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー) です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人 グループホームの理念を玄関と室内に掲示し、日常的に確認できるようにしている。2か月毎のグループホーム会議で理念を基に地域の方の力を借りながら心地よい暮らしが出来るように話し合い、日々のケアに繋げている。	玄関や職員の目に付きやすい場所に「グループホーム理念」と「グループホーム重点目標」を掲げ、常に意識しながら支援を行っている。日々の申し送りの際に振り返りを行い、正しく実践が出来ているかを話し合いながら支援に取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の夏祭り、サロンなどに参加させていただき、交流を深めている。コロナ禍は中止していたが、感染状況を考慮しつつ徐々に再開している。	コロナ禍で自粛していた地域との交流が、少しずつ再開できている。利用者は、感染症対策を継続した上でサロンや祭りにも出かけている。待ち望んでいた地域との交流が実現でき、利用者の笑顔と笑い声が聞こえるようになってきている。	
3	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では自治会代表・民生委員など委員の方や家族から意見をいただき、ケアに活かせるようにしている。	自治会をはじめ、シニアクラブ、社協など多くの団体から委員が参加し、意見交換を行っている。避難訓練、ヒヤリハット、計算ドリルを活用した利用者支援等、具体的な取り組み状況を報告している。出席者からの提案、厳しい意見もあるが、議事録には発言内容も詳細に記し、運営に活かしている。	
4	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市担当者に運営推進会議に参加していただき、会議時に事業所の実情を報告している。また毎月市の担当課に待機者の報告を行っている。	運営推進会議には、毎回、市担当者の出席を得ている。地域の高齢化や介護保険の動向について説明を受けている。事業所の現状を報告しながら、コロナ感染対策など、細やかな指導を得ている。	
5	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	現在身体拘束対象者はいない。3か月に1度身体拘束に関する会議を行い、具体的な事例を挙げて現在のケアの再検討を行っている。会議内容をグループホーム会議で周知し日頃のケアを見直す機会を設けている。	身体拘束廃止委員会を定期的開催している。現在は拘束が必要な利用者はいないが、委員会での報告内容や拘束の弊害について、全職員が学習会で学んでいる。玄関の施錠は、職員が少ない場合以外は開放し、拘束につながらない取り組みに努めている。	
6	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	苑内研修等で学んでいる。3か月に1度会議を行い、職員からの聞き取りから検討事例を挙げ、対応策を検討している。	虐待防止委員会は身体拘束廃止委員会と同じメンバーで構成している。職員研修のひとつとして、虐待防止を学び、言葉による虐待についても注意喚起をしている。あざが付きやすい体質の利用者には、特にケア方法に配慮している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	苑内研修等で学んでいる。		
8		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約書等は必ず口頭で説明し、質問等を受け同意を得ている。		
9	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族の面会時や病院受診の訪問時には必ずお話しし、要望や意見を伺うように心掛けている。	担当制を設けて、利用者の身体の様子、食事、入浴、排泄、睡眠など、項目別に分かりやすく記述した月次報告書を家族に送付している。家族から、レクリエーションの参加状態、介護計画の状況等の説明が求められたり、体重の増減についての意見が出る事もあり、その都度、対応し改善につなげている。	
10	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	2か月毎にグループホーム会議を開き、積極的に意見を出し合っており、よりよいケアが行えるよう努めている。シフト上会議に参加出来ない場合にも、事前に意見収集をしている。	職員全体の意見や希望を把握するため、事前に意見収集を行った上で、定期的にグループホーム会議を開催している。匿名での提出が可能であることから、率直な意見が届き、改善に繋げながら運営に反映させている。	
11	(9)	○就業環境の整備 代表者は、管理者及び職員個々の努力や実績、勤務状況を把握するとともに、職員が向上心を持って働けるよう、ワーク・ライフ・バランスに配慮した職場環境や就業条件の整備に努めている	施設長による個人面談があり、率直な意見を直接伝える環境がある。	ワーク・ライフ・バランスに配慮しながら、職場環境作りや就労条件などの整備に取り組んでいる。職員休憩室が確保され、安心して休憩を取ることができる。休憩時間は、職員の希望も聞きながら、時間の調整を行っている。	
12	(10)	○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	月に1回苑内研修があり、知識・技術の習得に努めている。また、外部での研修もリモートなどで受講している。	定期的に行う苑内研修や、外部から講師を迎えた研修等、学習の機会を多く設けている。職員の資格取得の機会を確保するため、勤務時間に配慮をしたり、リモートでの研修も安心して受講ができるようサポートしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会づくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	岐阜県グループホーム協議会、第一支部会や外部研修への参加がある。近年はコロナ禍の為、リモートにて参加している。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
14		○本人と共に過ごし支え合う関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	レクリエーションでの作品作りや洗濯たみなどを通して共同作業の充実を図っている。		
III. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
15	(11)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者への声掛けを積極的に行い、利用者の思いを引き出すよう傾聴に努めている。困難な場合は表情や仕草などから思いを読み取り、意向に沿えるよう努めている。	職員は、理念である「利用者の主体性を生かす」を常に意識し、利用者の思いや意向を把握できるよう傾聴に努めている。個別ケア時には表情などに注視しながら、返事がし易い声かけを心がけている。新たに知り得た情報は職員間で共有している。	
16	(12)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者本人、家族から思いや希望を聞き、グループホーム会議やケアマネージャーと事業責任者、担当職員間で話し合いを行い介護計画を立てている。	介護計画作成時には、LINEやメールを活用しながら、家族の意見を聞いている。訪問時には、直接意見交換を行っている。コロナ禍で家族とゆっくり話す時間は取れなかったが、担当職員が送付する月次報告書なども参考に、現状に即した計画を作成している。	コロナ禍は、家族と十分な意見交換の時間を持つことは困難であった。今回、ケアマネージャーが交代したこともあり、家族と日程調整をし、家族参加での介護計画作成会議開催に期待したい。
17	(13)	○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	PCシステム内に日々の健康状態、心身の変化、生活の様子などを入力し、職員全員が周知できるようにしている。	個別記録はPCシステムに入力し、職員全体が確認できる。個別記録を詳細に記入することで利用者の様子や変化が分かりやすい。情報が確実に伝わるよう、申し送りですらに確認をし職員間の情報共有を徹底している。	
18	(14)	○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	受診は協力をお願いし家族対応を基本としているが、救急対応時など、家族の都合上やむを得ない場合は職員が病院に付き添うなど柔軟に対応している。	利用者と家族の希望に応じて、訪問医師、歯科医師、個別にマッサージ師なども受け入れている。かかりつけ医の受診は家族が対応することになっているが、緊急時や家族の要望で職員が同行する場合もある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	毎月行われている地域のふれあいサロンへの参加、ボランティアによる読み聞かせ、笑いヨガなどがある。コロナ禍は中止していたが、感染状況を考慮しつつ徐々に再開している。		
20	(15)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居以前からのかかりつけ医を継続して受診している。身体的な変化があればその都度電話や手紙で報告している。	契約時に、かかりつけ医について、事業所の方針を説明している。ほとんどの利用者が入居前のかかりつけ医を継続している。受診は、原則家族対応とし、緊急時は事業所が支援している。個別契約での往診も受け入れ、家族と情報共有している。	
21	(16)	○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院後は病院に定期的に状況の確認をし、退院時には担当看護師、家族、ケースワーカー、ケアマネでカンファレンスを行っている。	入退院時は家族と情報を共有し、病院への訪問は管理者が中心に行っている。利用者の様子などを把握し、病院関係者と密に情報交換を行っている。退院後の生活についても、関係者と連携しながら、本人・家族が安心できるよう支援に取り組んでいる。	
22	(17)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	当事業所では終末期ケアに関しては、まだ未定である。特養が隣接している為、重度化した場合や終末期ケアに関しては、特養の利用や他施設を探す等、家族に説明し同意を得ている。	入居時に、重度化や終末期について、事業所の指針を説明し、家族と利用者の同意を得ている。利用者の状態変化時には早い段階で、関係者が意見交換を行い、隣接の特養や他の施設、関係機関の情報などを提供している。	
23		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	地元の消防署にて救急救命やAEDの使用方法の講習を受けている。また、ホーム内に酸素ボンベ・吸引器を設置し管理を行っている。		
24	(18)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の消防署の立ち入り検査と、消防訓練を行っている。	法人全体とグループホーム単独で火災訓練を実施している。各居室に利用者用ヘルメットを備え、緊急時や避難誘導の際に装着できるよう訓練もしている。近くに山や川があり、地震・水害訓練を隣接施設と合同での実施を検討中である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
25	(19)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者一人一人の様子を見守りながら、自主性を尊重した支援を心掛けている。個々のバックグラウンドを職員に周知し、日々の声掛けや傾聴時に言動の配慮をしている。	「利用者の意思や思いを尊重し、自分らしい生活を送る支援」は事業所の理念であり、一人ひとりの人格を尊重し、プライバシーを損ねない対応に努めている。特に、利用者との会話は、ゆっくりと穏やかな声かけに努め、自己決定を引き出しながら、本人本位の支援に繋げている。	
26		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	おやつやお茶の時間には、飲み物等の希望を聞いている。余暇時間には思い思いの行動が出来るように働きかけている。		
27		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	食事などの時間は決まっているが、延食をするなど一人一人のペースに合わせている。起床・就寝時間には声掛けはするが、出来るだけ個人に合わせた対応を行っている。		
28	(20)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	献立は利用者の好みや希望を聞き入れるようにしている。季節行事の献立や季節の果物などもデザートやおやつに取り入れ、旬の味を楽しんで頂いている。	利用者の希望も聞き、特養の管理栄養士の指導を受けながら、家庭的な職員手作り食を提供している。「今日の食事」の献立を大きく掲示し、時には夕食欄に「お楽しみ」とだけ記載するなど、利用者がワクワクするよう工夫し、食べる楽しみにつなげている。	
29		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎回食事摂取量を記録している。体調に応じて水分摂取量の記録も行っている。毎月の体重測定、特養の管理栄養士に食事に関しての相談を行いアドバイスをもらっている。		
30	(21)	○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、全員に声掛けをし口腔ケアを行っている。就寝前には義歯を預かり洗浄剤による消毒を行っている。	口腔ケアについて、定期的な研修を行なっている。利用者と職員が共に口腔ケアの大切さを学び、手本を見ながら実践している。居室にも洗面台があり、自分で出来る利用者は可能な限り本人に任せ、入れ歯の点検は職員が行い、必要に応じてケアの補助をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	一人一人の排泄パターン把握し、日中のトイレ誘導、夜間のポータブル設置、パットの交換などを行っている。パットも個人に合わせて容量 形態を変えている。		
32		○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	入浴前には必ずバイタルチェックを行い、体調にあわせて3日に1度入浴して頂いている。バイタルが正常値でも本人が入りたくない時は無理せず、時間を置いて清拭更衣の声掛けをしている。		
33		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中の余暇活動やビデオ体操、散歩などを行い夜間の安眠に繋がるようにしている。眠れない利用者には無理な声掛けはしないで、一緒に軽作業をするなど、一人一人に合わせた対応をしている。		
34	(22)	○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	誤薬が無いように、服薬管理シートを作成し配薬から投薬迄管理を行っている。体調の変化や薬の相談等は受診時にかかりつけ医に相談している。	担当職員が責任を持って、配薬から投薬、利用者が飲み終わるまでの確認を徹底した服薬管理を行っている。薬の変更時は、管理者が職員全体に目的や効能等、注意事項を説明している。	
35	(23)	○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	朝食のヤクルト配り等のお手伝いをして頂いたり、手作業が得意な方には季節の催し物の飾り作りなど得意なことを活かせる機会を作り、出来る事をやって頂いている。また余暇活動やサークルへの参加も個人に合わせて配慮している。	家族の要望もあり、利用者の自立に繋がるよう、これまでの経験を活かして掃除や洗濯作業、季節の飾り作りなど、出来る事を手伝っている。職員は「助かります、ありがとう」の言葉で利用者を労いながら、利用者が自信を持てるよう支援している。	
36	(24)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍は車での外出は控えていたが、感染状況を考慮しつつ徐々に再開している。毎日の散歩では、気候や天気に合わせて苑外へも出掛けている。	遠方への外出は自粛していたが、現在は近隣の散歩、数人での買い物外出を支援している。また、少し足を延ばして神社や公園などにも出かけている。季節の花を見たり、住民との会話を楽しむなど、地域の一員としての日常に戻りつつある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	精神的な面から、ご自分で財布を所持したい方には、家族の理解を得て少額の金銭を所持してもらう。		
38		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話希望の方には、その都度介助している。オンラインによる面会対応も行っている。家族や親しいかたとの手紙を支援している。		
39	(25)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホームの共有スペースには大きな窓があり、裏山の四季の移り変わりを楽しむことができる。食堂は椅子・テーブルがゆったりと配置され、思い思いの場所で過ごして頂けるようにしている。家庭的で明るい雰囲気になるように、サークルでの作品や季節の花などを飾っている。	大きな窓から、季節の移り変わりを感じることができる。共用の空間、居室の窓も掃き出し窓になっており開放的である。畳の部屋で寛ぐこともできる。十分な広さがあり、清潔で安心・安全に移動ができる。様々な作品を掲示し、家庭的な雰囲気である。トイレの広さもゆとりがあり、介助もしやすい。	
40		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居間を中心に居室が配置されている為、1人になりたいときは、直ぐに居室に行くことができる。1ユニットのため、どの居室にいても食堂や居間の様子が伝わるようになっている。		
41		○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れた馴染の家具や、家族の仏壇を置かれている。また思い出の写真や家族の写真を飾ったりしている。		
42		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	廊下には手すりを設置。杖・押し車・歩行見守り・車椅子等、個々の身体状況に合わせている。歩行される方も体調により必要時には車椅子対応をしている。		